Soul Regieren ～印を持つ者たちの詩～

西安

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｏｕｌ　Ｒｅｇｉｅｒｅｎ　～印を持つ者たちの詩～

【Ｎコード】
Ｎ６９６５Ｕ

【作者名】
西安

【あらすじ】
とある平凡な高校生、三神翔は夢の導きによって異世界へと身を投じることとなる。そこには「印」と呼ばれる力が存在していた。そこで翔は「印を持つ者」の一人である少女エーベルと出会う。複雑な事情を持った科学軍事組織パルマケイアの「世界計画」。その計画は「印を持つ者」たちへの絶対的な宣戦布告でもあった。エーベルたちとの交流の中で、自分にも「印を持つ者」の血が流れている事を知った翔は本当の自分を探すため、共にパルマケイアの計画実行を阻止する事を決める。

中二病（？）中三生が描く王道純粋脱線なしの一直線ファンタジー小説。

プロローグ　～機械音の記憶～（前書き）

どうも、はじめまして。

中二病が未だに抜けない中三の西安です。

とりあえず、基本のファンタジーということで書いてみました。

作品を読んで頂いた上での感想、ブーイングなどは大歓迎です。是非よろしくお願いします。

稚拙な表現などが多いと思いますが、御了承ください。アドバイスなども頂ければ尚幸いです。

まあ中三生が書いた授業中の落書き程度だ、と軽い気持ちで読んでいただければなと思います（笑）

それでは、どうぞ。

プロローグ　～機械音の記憶～

プロローグ　～機械音の記憶～

深淵の暗闇。鼻をさすような、オイルの臭いが辺りを包み込んでいる。

ウンウンと、無数の機械が唸る音が、その音だけが辺りに響き渡っている。

口の中に粘ついた奇妙な感覚が広がっている。

舌で口の違和感を取り除こうとするが、あまり効果はなかった。

横になった体を起こし、疲弊した両眼で周りを見渡してみる。しかし閉ざされた闇の世界では、当然視界も閉ざされたまま。視界には全く何も映っていない。

部屋に響く機械の唸る音は単調で、一定のまま変わらない。かと思えば、たまにテンポがずれたり、音が止んだりもした。随分と不規則だった。

……どうも頭が痛い……ここは、何処だろう……？

頭がはっきりとしていない事だけは、よく分かった。ここが、自分の知っている所――自分が来たことのない場所だというのは確かだろう。

際限のない闇が広がっている。

全く色の無い世界。もっと言えば、純粋な黒色のみが存在する世界。
――どんな白いパレットに　どんな明るい色を加えたとしても。
　ただ一点の黒が存在する限りは　本当の白は創れない――

相変わらずオイルの臭いが辺りに漂う。機械音が聞こえるが、やはり機械油だろうか。

ずっと暗闇の中に一人で居ると、遠い世界に取り残されたような気分になる。自分の身体がふわふわと宙に浮かんでいるような不思議な気分にさえなる。孤独、という言葉が頭に浮かんだ。

……少しずつ目が慣れてきたようだ。
ぼんやりと映るタイル張りの床に、薄汚れた白い壁。天井には蛍光灯のようなものが見えるが当然役割を果たしてはいない。
そして目の前に佇む巨大な、頑丈そうな扉。黒い世界の中でも、その重厚さは瞳を通して伝わってきた。

他には小さな換気用の窓があるだけで、陽光が入り込む隙間など殆ど無かった。部屋の中は狭く、陰湿で、何故だか不穏な雰囲気を漂わせていた。

――ふと機械の唸る音が止み、部屋の中に静寂がもたらされる。
自分だけにしか聞こえない心拍音が、部屋に漂う静寂を一層強いモノへとさせた。

それを示し合ったかのように外から乾いた音が聞こえ始めた。

一定のテンポを刻みながら音はだんだんこちらへ近づいてきて、その音が部屋の外で反響する。最終的には、再び唸りをあげる機械の音をかき消すほどのものになっていた。

……これは……足音……？

音を頼りに、ぼんやりとした意識の中で何とか今までの記憶をたぐり寄せる。

濃霧を振り払うかのように、自分の意識が少しずつはっきりしていくようだった。

硬直した時間が過ぎて、自分にしか聞こえない自分の脈動がだんだんと大きく強くなっていく。

そして、その結論にたどり着くのとその乾いた音が止まるのとがほぼ同時だった。

……そうだ。早く、ここから逃げないと……

身体が咄嗟に反応し、脳からの指令を忠実にこなそうとする。

しかし、動けなかった。

今まで気付かなかったが、両手を鎖か何かで拘束されているらしい。

改めて手首に伝わる冷たいヒンヤリとした感覚が何なのかを察する。

錆ついた鈍い音を立て、目の前の重厚な扉がゆっくり開いていく。

微かな光が徐々に太く、線状となって部屋に差し込んでくるのが見えた。

扉の鈍い音が止まぬままに、部屋の灯りがパッと灯された。

今までの暗がりでの光景がはっきりと目の前に現れ、暗闇に慣れていた両眼を照明の光線が襲う。

……眩しい。随分と長い間ここに囚われていたみたいだ……

「ふん、こんな所に居たか。幹部がお呼びだ。早く来い」

部屋に単調な低い声が反響する。その反響音でやはり機械の唸りがかき消されて、聞こえなくなる。

もちろん、今まで強い脈動を感じさせていた自分の心拍音さえも。

どうやら組織の人間のようだ。

群青色に光沢を放つ鳥打帽を被った組織員の胸元には、照明の光を反射して金色の徽が輝いている。

私の父さんのそれが、そうであったように……

――その時、頭の片隅から一つの疑問が浮かび上がり、それはすぐに焦りへと変わった。

……父さん！父さんは何処へ！？……

身を乗り出すが、駄目だった。鎖で両手を繋がれた身体は自らの思い通りに動いてはくれない。

けれども、その必要はなかった。

なぜなら質問の回答は最悪の結果と共にその男の口から告げられたからだ。

嘲るような笑い声が、狭いこの部屋でより大きなものへ変わる。

「ほら来な、お前、何だそのカオは？もしかしてお前、オヤジを殺られたのがそんなに悔しいのか？」

部屋に響く組織員の笑い声が、頭の中でも再びエコーとなって繰り返される。
世界中の時間が一瞬だけ止まり、自分の世界がバラバラになった気がした。

……そ、そんな？……父さんは、もう……！？

「お前のオヤジは組織に刃向かった反逆者だったからな。だが、そんな事はもうどうでもいい。お前にはもっと重要な『役目』がある……」

「あなた達は、私の、私の父さんを殺したの……！？」

その男の言葉を聞いているのが苦痛となり、自然と自分の感情が震えた声となって漏れる。

――動揺が隠せないような状態に陥っていたのが、自分でも分かった。体の震えは止まらず、軽い吐き気さえも覚えた。汗が、繋がれた両手に滲んで濡れた。

すると男は悪びれる様子も見せず、逆に途中で話を切られたことに対して不満そうに言葉を返した。

「はっ、嘘をついているとでも思ったか？無駄な話はここまでだ、とっとと来な」

その言葉を聞いた途端、急に自分の心を何だかよくわからない鋭い刃のようなもので軽く突かれたような衝動が襲った。

――服のポケットから出した古い小型のトランシーバーで部下に命

令を下したかと思うと、踵を返して扉の方へと近づいていく組織員の背中は私の父さんの背中にも見えないことは無かった。でも全く違った。

……父さんを……許さない……絶対に……

それは確かな、その男に対しての、組織に対しての憎しみの感情だった。

――父さんを殺した罪を、償わせてやる……

激しい苛立ちを抑えながら、体中の精神を集中させ、一点に力を注ぐ。

自分の体の中から熱いものが込み上げてきた。沸き起こると言った方が適切かもしれない。

危険だというのは何度も教わっていた事があり、知っていた。

だがもう自制する事はできなくなっている。もちろん止めるつもりもなかった。

陰湿な雰囲気を漂わせていた部屋には熱気がたちこめて、サウナの中のような状態になっていく。

そして、少しずつ自分の理性が失われていくのを感じる。

私の異変に気付いた組織員が――しばらくは余裕の表情を浮かべていたのだが――何かを感づいたようで急に取り乱し始める。逃走を図ろうとするが重厚な扉は完全に閉まっており、もう間に合うはずがなかった。それに、逃げたって同じだ。

最後の希望とばかりに、私に向かって悲痛な表情を浮かべて訴える。

呂律が回っていなかったからなのか、それとも私の精神状態がおか

しかったからなのか、その言葉は私の耳には伝わらなかった。

組織員のその姿は――自我を失って叫びを上げるその姿には、もはや父の影など欠片も残っていなかった。

――ただいえる事は、これがこの名も無き組織員の最期となるだろうということだけだ。

……右腕の掌の印が輝きを帯び始めている頃だろう。焼けるような痛みが全身を覆う……

「……焔よ、我を阻む者を燃し、焦し、煉獄で覆いつくしたまえ！！……ウィルカヌス・ヘェファイスト！！！」

一心にそれを唱えると、体が痛みから解放されると共にあたりを炎と爆音、そして断末魔の叫びが覆った。眩い光線の中、自分が何処に居るのか、分からなかった。

第一連　平凡なある日

第一連　平凡なある日

「……であるから……だな。これで部分積分が……じゃあ、三神！この準公式の証明、やってみろ。難しいかもしれんが……ん？三神ー？」

「おい、起きろよ、おいって」

小声で声を掛けられ、トントンと背中を叩かれた。う、うん、と軽く返事をして、寝ぼけ眼で黒板の方を見る。
ん？何事だ？俺、寝てたんだよな？

「おいっ、三神！お前、センター試験が近くて、昨日も夜まで勉強してたのは分かるが、ここも重要な単元だぞ？しっかり聞けよ！」
「あ、はい、すいません」

何だか分からずに、立ち上がりすぐに謝って席に着く。
その直後、この学校独特のチャイムが鳴った。どうやら授業が終わったようだ。

「おいっ、カケル！お前寝てる時に唸ってただろ？どんな夢みてたんだよ？」

先生が教室から出て行ってから、背伸びをしていると、後ろからまた声。

まだ頭が痛い……俺さっき、何か変な夢を…？

「……んむ、爆発して、そんで……ん？」

それに答えようとして、自分の口の中でもごもごと舌を動かす。しかし、はっきりした声にはならなかった。

あの夢を何回も見るようになって、もう二週間だ。色とか臭いがある夢がある、というのは聞いたことがあるが、あまりにもリアルな夢だった。もしかしたら俺、頭がどうかしちゃったのかもしれない。授業中に寝ることなんて滅多に無かったのに。

「大丈夫かよ、おい。ま、どうせ昨日も夜更かしして、変なモンでも見てたんでしょー」

唾を飲み込んで、仕切りなおす。こんどはしっかり声になった。

「んなんじゃねえよ、昨日も夜更かししてねえし」

にやにやと気持ちの悪い笑顔を浮かべているアホに、キッと鋭い視線を送る。それはこっちの台詞だっての。

俺の同級生、片桐修治。小学校の時からの腐れ縁だ。中学時代には同じ卓球部に所属しており、全国には行けなかったまでも県大会では四回戦まですすむ事が出来たのはシュウジのおかげだったりもする。見かけの線の太さとは裏腹に「硝子のように繊細なココロを持った草食系男子」らしい――もちろんこいつの自称だが。

そして俺がセンター試験を目の前に迎えた高校三年生、三神翔。

俺たちが通っているのは市立桜庭高等学校、通称桜高。自分で言う

のもなんだが、市立の中ではエリートの部類に入る学校だ。
二年前くらいには東大合格者が出たとかで、結構話題に上ったこともある。

そんな高校生活を送るようになってから三年。もうすぐ大学受験を控えた俺たちには、慢心はない…はずなのだが、あまりピリッとした緊張感が得られずにいる。
もちろん進学希望の大学は決まっているし、勉強もあせり始めている頃だ。部活だって最後の大会がまだ残っている。

けれど平凡で、平和で、生活の中にちょっとした刺激がたまにあって。
それでいて平凡で平和。

今の俺たちは、そんなぬるま湯に浸かったような生活を未だに送っている。
この生活が、終わる実感がない。

最後の七限目の授業が終わり、英語の岸田先生が重たそうな教材を持って帰っていく。今日は終礼がないので、この時点で各自解散だったはずだ。

と、また背中に威勢の良い声。全く元気がなくなっている様子がないのが不思議だ。

「カケル！放課後、どっかよってこー？」

「はあ？お前、もうすぐセンターだろ？勉強しなくていいのかよ？」

こいつ、頭がどうかしたんじゃないだろうか。

「大丈夫だって！どーせ今更足掻いたって通用するモンじゃないしな。さ、今日ぐらいは疲れとって、万全の体調とコンディションで試験に備えるのが一番って事で！」

――――って。こいつの言っていることは半分以上が間違っているのに、なぜか説得力がある。今までどれだけ苦労させられことか……

「な？カケル？大学生になったら、もう高校生には戻れないんだぜー、分かったー？」

「はあ。分かった、分かった。で、今日は何処へいくんだ？」

喫茶店程度ならば、俺の家の近くにあるし、気分転換にはもってこいかもしれない。

「へへっ、今日はゲーセンへ……」

「帰る」

バカみたいだ、帰ってセンター試験用の数学問題演習集でもやっておくか。今日寝ちゃったから、その分をやろう。

「ま、まてまて。話せば分かる。そこ、最近出来たゲーセンでさ、ニュータイプのシューティングゲームだろ、スロットとか、ええと、ＵＦＯキャッチャーと…」

机の中から数学のテキストを引っ張り出す。後は…理科の地学分野。ロッカーに入れてあったかな。家に置いてきたかもしれないけど、後で確認しておくか。

「そうだ、もしかしたらチェスゲームあるかもしんねえ！」
ふっと紺色のくたびれたバッグにテキストを入れる手を止めた。チェス？
「そうそう、『銀騎士列伝？』の台あった、あった。お前チェス好きだモンな…」
「そこ、何処にあるんだ？」
シュウジが言い終わるか終わらないかのうちに聞いた。あるんだな。ギンキシが。
「え、えっと桜庭駅の次の、次の、次の駅だから…待てよ…うん、緑園の近くだな…」
よし、決めた。
「行く、決めた、付いて来い」
「うえっ？は、はあ。お前、ホントにチェス好きだなあ」
呆れ顔のシュウジを横目に鞄を片手に背負うと、地学分野のテキストを確認する事も忘れて、セピア色に薄れた教室を後にする。
市内電車に乗って、適度に離れた所にある緑園駅。近くには閑静な住宅街が並ぶ緑丘団地がある。確か下見山の斜面に造られた団地で、ごく最近できたものだと知っていた。
電車に揺られること約十五分、緑園駅のホームへ足を下ろす。
ざらざらのアスファルトに、何故か親近感を覚えてしまう。大きな緑色の広告版は黄ばみが見えてきて、寂しげにいくつかの画鋲だけ

が張り付けられていた。
住宅地の近くの駅とは思えない趣だ。
駅からすぐのところに、そのゲーセンは大きな看板を抱えて建っていた。外の派手な装飾は、何処とも変わらず、何処とも違う。
ふと西の空を見ると、まだ日は傾いていなかった。若干、茜色の空だ。

「おい、チェスの台って何処だ？」
「ふう、まあ焦るなよ、とりあえず中に入ろうぜ」
走ってここまできた俺を、後から追いかけてきたシュウジが息を切らす。

冷房のかかった薄暗い店内に入ると、やはり何処とも同じような、それでいて全く違う数々の光が舞っていた。シュウジはシューティングゲームを見つけると、すぐにそっちへ走って行ってしまった。
最近流行のバンドがリリースしたばかりの曲がかかっている。若い店員とすれ違う度、小さな声での挨拶が聞こえる。
……俺たちの学校は確かに環境の良い学校ではあるが、バイトが禁止だからそこが微妙なところだ。
大量のスロット台の横を通り抜け、目当ての台へと向かう。
昔からチェスが好きだった。駒一つ一つがそれぞれの思いを持っているかのように思えたからだ。王を守るために、黒と白の二つの相対するもの同士が、自らの命を犠牲にして、相手を打ち砕こうと欲する。
なんとも戦略的で、それでいて繊細なボードゲームだと思う。

さて、『ギンキシ』は……っと……あった！銀色のチェス台の上で、実際に駒を動かしてコンピューターと対戦するチェスゲームだ。ちょっと前までは家の近くにココと同じようなゲーセンがあったのだが、そのゲーセンが潰れてからはしばらく疎遠になっていた。今日こそは久しぶりに羽目を外すとしよう。

荷物を床に置いていると、新しいモードの説明のプロモーションが台の上に映し出された。

――どうやら、今世界中の何処かで「銀騎士列伝？」をしている人たちと対戦ができるモードらしい。いわゆる、『オンライン対戦』という奴だ。

早速、近くにあった細長い両替機で千円札をコインに変えてギンキシの台に戻る。

と、その瞬間だった。

視界の端にふと黒い影が映る。

……え……今の……？

黒い影が視界から消え、急に凄い痛みが頭の中を駆け巡る。体が燃えるように熱い。

……うっ……何だ、これ……？

我慢しきれなくなって、座り込んでしまう。それでも、体中を刺すような痛みは一向に止まらない。より強くなっていく。

落ち着こうと、心臓に手を当てる。血液がドクンドクンと、留めなく流れていく音がする。相当な心拍数だ。

汗が、額からピカピカに磨かれたゲームセンターの床に滴り落ちる。

深呼吸をしようとするが、できない。呼吸が苦しい……

どのくらいの時間が経ったのだろうか。

意識が無くなりかけたとき、耳元で誰かの声がした気がした。

すると、今までの頭の痛みも、体中から沸き起こる熱も、悪い汗もすっと消えていった。

冷房の効いた店内の空気が体を包む。

「……はあっ、はあ……はあ」

呼吸はまだ荒いままだ。ゆっくりと深呼吸をする。

と、中年の男の声がした。声ははっきりとは聞き取れなかったが、きっと心配して駆け寄ってきた店員だろう。やっと、現実に戻ってきたような気がする。

隣からかすかにシュウジの声がする。俺……どうしたんだろう？

結局、俺はそのまま家に帰ることになり、シュウジも一緒に帰ってくれた。電車の中でシュウジの笑い声を聞きながら、明日、念のため病院に行くことにしよう、と思った。

家に帰り、飯を食って、風呂に入ったあとすぐに自分の部屋の布団に潜り込んだ。学校から持って帰った問題集をやるつもりだったが、風呂に入っているうちにやる気が失せてしまった。

……結局、ギンキシやれなかったな……

布団をかぶって一人、苦笑いを浮かべる。あの声、どこかで聞いたことがあったような気がするな……確か……

自分の布団の中で、ゆっくりと眠りに落ちかけた時だった。

「……」

はっと目が覚め、布団から身を起こす。あのときの声…？

「……て……」

今度ははっきりと聞こえた。これは…夢？夢の中の娘の声だ…

そして再び、脳天を針で刺すような痛みが頭の中に駆け巡った。

…また、だ……っ……

布団の端を必死に握り締めて、我慢しようとする。本当に、どうしたんだ、俺……

あの時の倍はあるだろうか。体が火照ったように、いや、炙られているかのように、痛い。前と同じように、呼吸が自分の思うように出来ない。

全身から噴き出してくる汗。辛さのあまり、声を嗄らして叫び声を

上げるが、痛みは一向に酷くなっていく。

痛みだけが伝わってくる朦朧とした意識の中、特に何も考える事はできなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6965u/

Soul Regieren ～印を持つ者たちの詩～

2011年10月9日09時08分発行